

三重県心のノート

小学校5・6年

三重県教育委員会

みなさんへ

みなさんは、社会の宝、生まれながらにしてかけがえのない存在であり、一人ひとりが「大いなる可能性」をもっています。変化の激しいこれからの社会の中で、自らの可能性の実現に向けてたゆまぬ努力を重ね、豊かな人生を築くとともに、よりよい社会づくりに貢献できる人になってください。

そのためには、自らの夢の実現をめざし、主体的に学び、困難を乗り越え、自信と意欲をもって輝く未来をきりひらいていく力（自立する力）を身につけることが大切です。

また、一人ひとりの違いを認め合い、お互いを尊重し、豊かな人間関係を築くとともに、命を大切にする心、人に対する感謝や思いやり、善悪の判断などの規範意識、郷土に対する誇りや愛情などをもち、ともに支え合い生きていく未来づくりに貢献する力（共に生きる力）を身につけることも大切です。

このような期待をこめて、道徳の時間をはじめとし、各教科の学習や学校生活全体の中で、また、家庭においても活用できる道徳学習用の教材として、「三重県 心のノート」を作成しました。

教材の内容については、三重県の郷土学習用の教材「三重の文化（郷土の文化編）」から、さまざまな分野の発展に尽くした人物や、自然、伝統と文化をテーマとして取り上げました。みなさんが郷土のことを詳しく知り、郷土への誇りをもつとともに、先人の生き方や豊かな自然、すばらしい伝統と文化について学ぶ中で、自分の生活や体験を振り返り、毎日の生活を見つめ直し、これからの行動や生き方について考えることができるように作成しています。

みなさんが、学校や家庭、地域での学習や生活の中で、「三重県 心のノート」を積極的に活用することを通して、自分の生き方について考えを深め、自ら道徳性をはぐくみ、これからの社会をたくましく生き抜いてくれることを期待しています。

平成 26 年 3 月

三重県教育委員会

き そさんせん ちすい 木曾三川と治水	1
多くの人々に支えられ、私たちの今がある	
ばん こやきちゅうこう そ もりゆうせつ 萬古焼中興の祖～森有節～	5
「創造」と「工夫」 伝統を未来につなぐ	
さ さき のぶつな 佐佐木信綱	9
人を思う心 ふるさとを思う心	
かめやまじゅうく せきじゅうく 亀山宿から関宿へ	13
地域に受けつがれる伝統や文化を見つめよう	
もとおりのりなが 本居宣長	17
たゆまぬ努力で困難をのりこえる	
の ろげんじょう 野呂元丈	21
医学の発展のために 科学の発展のために	
まつ お ばしゅう 松尾芭蕉	25
古きよき伝統 これまでも、これからも	

三重県

心の
アート

小学校5・6年

多くの人々に支えられ、私たちの今がある

木曾三川と治水

木曾三川とは、濃尾平野を流れる木曾川、揖斐川、長良川の総称です。全てが木曾川水系に含まれ、濃尾三川とも呼ばれています。かつて、この三本の川は、下流部で合流・分流を繰り返し、たびたび水害を起こしていたため、江戸時代以降何度となく改修が行われてきました。



木曾三川河口付近（桑名市提供）

有名なものは薩摩藩が行った宝暦治水と、オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケらによる木曾三川分流工事です。

江戸時代、幕府は1753（宝暦3）年に薩摩藩に御手伝普請という形で川普請工事を命じ、翌年薩摩藩は家老の平田靱負を総奉行に任命し、藩士を現地に派遣して工事にあたらせました（宝暦治水）。桑名市内にはそのときの薩摩藩士の墓があります。

また、1877（明治10）年には、明治政府によって招かれたオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケが治水工事に派遣されました。洪水対策・輪中堤防内の排水改良・舟運の改善を主な目的として、三川と周辺の地形を調査し、分流計画書を作成、1887（明治20）年に分流工事が着工されました。その結果、当時の最新技術に基づいた分流工事は著しい効果を挙げ、水害による死者、全壊家屋または流失家屋は劇的に少なくなりました。

学習のめあて

木曾三川とよばれる木曾川、揖斐川および長良川は、かつて、複雑に入り乱れていました。このため、大雨が降ると川から水があふれ出し、大きな被害が出ていました。そこで、江戸時代以降、川の流れを整える治水工事が、何度も行われてきました。中でも大きな第一歩といわれているのが薩摩藩による宝暦治水です。

当時の薩摩藩はお金のやりくりが苦しく、幕府からの命令といえども、大きな工事ができるような余裕などありませんでした。しかし、薩摩藩家老の平田靱負の「同じ日本に住む、困っている人を救おう」という声のもと、およそ千人の藩士が濃尾平野に向かいました。

水とたたかいは難工事の連続でした。多くの人の命が失われ、また、巨額の費用がかかりました。多くの犠牲を払いながらも、工事は見事に完成し、そのできばえは幕府の役人も誉めたたえるほどでした。

薩摩藩士たちがふるさとから遠く離れた地で、命がけで行った治水工事は、当時の人々の命や財産を守っただけではなく、今を生きる私たちに大きな恵みを与えています。工事にあたった人々の姿が、今も語り継がれている意味や理由について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 木曾三川の流域で、たびたび水害が起こっていたのは、どうしてでしょうか。
- 2 ふるさとから遠く離れた場所での工事に向かうとき、平田靱負はどのようなことを考えていたのでしょうか。
- 3 薩摩藩士による治水工事の様子を、当時の人々はどのような思いで見えていたのでしょうか。
- 4 平田靱負を祭った治水神社がつくられたり、今でも毎年、薩摩藩士の慰霊祭が行われたりしているのは、どうしてでしょうか。
- 5 明治時代に木曾三川の治水工事に携わったオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケの業績について、調べてみましょう。
- 6 たくさんの人たちの苦労や努力の上に、今の私たちの生活が成り立っていることについて考え、話し合みましょう。

宝暦治水

昔、木曾三川に囲まれた地域は、大雨が降るたびに水害にあっていました。特に江戸時代の慶長から宝暦にかけては、毎年川の水があふれ出し、流域に住む人々は苦しめられてきました。

これに対して幕府は、この流域の治水工事を、遠く離れた薩摩藩に命じました。当時、幕府は、薩摩藩をたいへんおそれていました。そこで、薩摩藩の力を弱めるために、大きな負担となるこの工事を命じたのでした。

このころ、薩摩藩はお金のやりくりで大変苦しんでおり、この命令を引き受けることに反対する意見がわき起こりました。しかし、もし断れば、幕府に反抗したとみなされ、藩は取りつぶされることとなります。薩摩藩家老の平田鞆負は、苦しみ悩んだ末に、この工

事を引き受けることを決断しました。その時、鞆負は家臣たちに「同じ日本に住む、困っている人を救おう」と語り、同意を得たのでした。



治水神社内にある薩摩義士の像

薩摩藩は平田鞆負を総奉行に任命し、およそ千人の藩士を木曾三川流域に送って工事に取りかかりました。水とのたたかいは難工事の連続でした。そのうえ度重なる洪

水のために工事費はふくれあがり、多くの犠牲者が出ることになりました。

しかし、様々な苦勞の末、1755（宝暦5）年5月に工事が完成しました。工事中は、さまざまな嫌がらせをしていた幕府の役人も、工事が終了したときには、「日本中のどこを探しても、この工事ほど素晴らしいものはないだろう」と誉めたたえたのでした。

平田鞆負は、工事における40万両の費用と多くの犠牲を出した全責任を負って割腹し、

- 感謝しそれにこたえる
- 社会のために進んで働く

52歳でこの世を去りました。幕府の命令
 とはいえ、ふるさとから遠く離れた地を水
 害から救った薩摩藩士たちの血と汗と涙の
 結晶は、この後、流域の人々に語り継がれ
 ています。

1938（昭和13）年には、平田靱負を祭っ
 た治水神社（岐阜県海津市）が建てられま
 した。この神社では、毎年4月25日と10
 月25日に、薩摩藩士の慰霊祭が行われています。



治水神社



平田靱負の像（海蔵寺提供）



当時の木曾三川河口付近の地図（桑名市提供）
 P1の写真と見比べてみましょう。



宝暦治水工事の様子（常音寺提供）

「創造」と「工夫」

萬古焼中興の祖～森有節～

紫泥の急須や土鍋など、萬古焼は、四日市市の地場産業として有名です。その発祥は、桑名の豪商沼波弄山が江戸時代の元文年間（1736～1740）に朝日町の小向に窯を開いたことにさかのぼります。弄山の没後、萬古焼は一時途絶えましたが、桑名の田町に生まれた森有節が、弟千秋とともに小向の名谷に窯を開き、1832（天保3）年、萬古焼を再興しました。

有節は、急須の成形に特殊な木型を使用し、量産を可能としました。急須の内部には龍が浮き出るように木型にその文様を刻みました。

また、鮮やかな桜色の釉薬の開発にも日本で初めて成功し、世の喝采を浴びました。

これらの業績により、有節のつくり出した萬古は「有節萬古」と呼ばれ、「萬古焼中興の祖」として、その名は現在でも語り継がれています。



森有節（朝日町歴史博物館寄託資料）



有節作の酒器（朝日町歴史博物館委託資料）

伝統を未来につなぐ

学習のめあて

森有節は、一時途絶えた萬古焼を再興した人物です。有節の作品は、造形が精巧で、桜色の釉薬（うわぐすり）による見事な色彩が特徴です。有節は、特殊な木型による急須の製作方法を独自に開発し、鮮やかな桜色の釉薬の開発にも日本で初めて成功しています。萬古焼の名のいわれは、開祖である沼波弄山が、その作品が後世まで永く伝わるようにと、「萬古不易（「いつまでもかわらない」という意味）」という印をおしたことに由来します。有節は、弄山の孫のもとを何度も訪ね、作品に「萬古」の文字を使用することを許されます。有節は、「萬古」の印のそばに「有節」の印をおしていますが、これは、単に「萬古」印をおすのでは申し訳ないという思いによるものとも言われています。

有節が萬古焼を起こした弄山に抱いていた気持ちや、新たな創造や工夫を重ね、萬古焼を再興した有節の意志の強さや生き方について考え、話し合ってみましょう。

考えてみよう

- 1 森有節が新たに開発した萬古の技術は、どのようなものでしょうか。
- 2 森有節は、一時途絶えた萬古焼を、どのような思いで再興したのでしょうか。
- 3 森有節は、沼波弄山にどのような思いを抱いていたのでしょうか。
- 4 森有節は、自分の作品に、どのような気持ちをこめて、「萬古」の印をおしたのでしょうか。
- 5 森有節が新たに技術を開発し、創造や工夫を重ねた理由を考え、森有節の生き方について話し合ってみましょう。
- 6 自分たちの地域に伝わる、萬古焼のような伝統工芸品について調べてみましょう。

森有節

森有節（1808～82年）は、長らく^{すた}廃れていた
萬古^{ばんこ}焼^おを惜しみ、弟・千秋^{せんしゅう}とともに、その復興^{ふっこう}に
力を^{そそ}注ぎました。

好奇心^{こうきしん}のとても強い人で、ランプなど新しいも
のをいち早く^{こうじゅう}購入したということです。

こうした性格^{せいかく}は、作品を作る上で大いに^{はつき}発揮さ
れたことでしょう。また、陶器^{とうき}だけでなく、博物
学^{はくぶつ}を研究するなど、幅広い^{はば}知識^{ちしき}を持つ教養人^{きょうようじん}とし
ての一面を持ち合わせていました。



森有節（個人提供）

森有節の作品



腥臙脂釉菓子器（朝日町歴史博物館蔵）



いろえあきくさばなもんきゅうす
色絵秋草花文急須
（公益財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム蔵）

森有節が絵付けの時に使った釉葉^{ゆうやく}（うわぐすり）は軟彩^{なんさい}と呼ばれるもので、有節はこの
釉葉^{ゆうやく}を重ねて^{もりえ}盛絵^{ぎほう}の技法^{さいしよく}で彩色しました。

腥臙脂釉^{しょうえんじゆう}（左上の作品に使用）は、有節の作品にみられる特徴^{とくちょう}のある桜色^{さくら}の釉葉^{ゆうやく}で、軟
彩^{なんさい}の一種です。この色を出すには、原料をかきまぜるための時間^{くしん}がかかり、特に苦心^{くしん}した
と伝えられています。

薄い^{うす}腥臙脂釉^{しょうえんじゆう}の上に、濃い^こ腥臙脂釉^{しょうえんじゆう}で模様^{もよう}を描くのは、有節の得意^{えが}とした技法^{ぎほう}です。

- 目標に向かって生きる
- 郷土や国を愛する心を

急須の製作方法

有節が提灯を作る型からヒントを得て作り出した急須の製作方法は、「木型」を使ったものです。

木型の上から土をかぶせて形を作った後に、いくつかに分解して木型を取り出す仕組みになっています。

この急須は薄く軽いものに仕上がりに、同じ型のものが大量生産できるという利点がありました。

さらに、木型の表面に彫られた龍の文様が急須の内側に現れるようになっていたり、手の先に付けられたリング状の飾りや、つまみの部分がまわるようになったものなど、画期的なものでした。

『復興萬古—有節が求めたもの—』（朝日町歴史博物館）から作成



木型（分解したものの）



木型（組み立てたものの）

沼波弄山から森有節へ ～「萬古不易」～

萬古焼という名称は、沼波弄山が、その作品が後世まで永く伝わるようにと、「萬古不易」という印をおしたことに由来します。有節は弄山の孫へ、自分の製作した陶器に「萬古」の印をおす許しをもらうため何度も訪ねました。この時、単に「萬古」印をおすのでは申し訳なく、また、世間の人々も偽物と勘違いするので、そばに「有節」の印をおすことを望んだということです。

これにより「萬古」の文字を使用することが許されましたが、弄山が用いた印は与えられなかったということです。



「萬古不易」の印
（朝日町歴史博物館提供）

三重県史編纂グループWebページから作成

人を思う心

さ さ き のぶつな 佐佐木信綱

鈴鹿市石薬師町出身の歌人・国文学者で、万葉集・古典文学の研究や註釈、復刻にも力を尽くした人物が佐佐木信綱です。苗字の「佐佐木」は、中国で名刺を作った時に、印刷の字に本来の「々」が無かったことによるもので、以後好んで使うようになったといわれています。

1872（明治5）年、歌人佐々木弘綱の長男として生まれた信綱は、父の教えを受け5歳から作歌を始め、帝国大学文学部を卒業後、和歌の実作と研究を生涯の目標とし、万葉古写本の発見複製、『校本万葉集』の編集などに大きな功績を残しました。主な著書に『日本歌学全書』『和歌史の研究』『万葉集事典』や、自ら主宰した竹柏会の機関誌『心の花』や歌集『思草』『新月』などがあります。

また、門下生からも有名な歌人が出るなど、東京大学でも26年間にわたり歌学史などを教えました。1934（昭和9）年帝国学士院会員に、1937（昭和12）年には文化勲章を受章し、帝国芸術院会員となりました。

現在、生家は隣接する佐佐木信綱資料館と併せて、佐佐木信綱記念館となっています。



佐佐木信綱



佐佐木信綱資料館（鈴鹿市提供）

ふるさとを思う心

学習のめあて

佐佐木信綱は、28歳という若さで竹柏会という短歌の会を興して機関誌『心の花』を創刊し、和歌の世界の裾野を広げた人物です。また、万葉集の時代から現代にいたる和歌の歴史についての研究者としても知られています。

信綱は生涯を通して数多くの歌を残しています。著名な歌人を含む、多くの門人を育てた信綱の人は、次のような信綱の作品からもしのべられます。

「願はくは われ春風に 身をなして 憂ひある人の 門を訪はばや」
「白雲は 空に浮かべり 谷川の 石みな石の おのづからなる」

また、信綱は、北海道から九州に至る日本中の校歌の作詞を手がけました。三重県の学校でも、多くの校歌を残しています。

信綱の残した歌やエピソードから、ふるさとを思い、感謝する気持ちを持ち続けた信綱の生き方について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 佐佐木信綱は、どのような仕事を行ったでしょうか。
- 2 佐佐木信綱は、どのような人からだったのでしょうか。上の「願はくは…」、「白雲は…」の2つの歌に込められた気持ちや願いをもとに話し合ってみましょう。
- 3 佐佐木信綱は、どのような思いを込めて三重県の学校の校歌をつくったのでしょうか。
- 4 ふるさとを思い、感謝する気持ちを持ち続けた佐佐木信綱の生き方について、どのように思いましたか。話し合ってみましょう。
- 5 自分たちの住む地域で、文学や芸術の分野で活躍した人物について調べてみましょう。

「私は春風になろう」

そう強く願った28歳さいの男の人がいました。
佐佐木信綱です。1896（明治29）年、竹柏会ちくはく
という短歌の会をスタートさせました。

その第1回大会は1899（明治32）年4月6日、
場所は東京日本橋とうきょうにほんばしの会場です。信綱は180名を
上まわる人々の前で、静かに、けれど自信みに満
ちた顔で、出発の歌を詠よみ上げました。



第1回竹柏会で歌を詠む信綱を描いた絵

願うれいはくは われ春風かどに 身をなして
憂うれいある人の 門かどを訪とはばや

《願うれいいがかなうなら、私は暖あたたかく野ふを吹く春風かどになりたい。そして悩なやみや心配しんぱいごと
を持っている人々たずを訪たずねては、慰なぐさめたり励はげましたりしてあげたい》という歌です。

信綱は、歌を詠みながら、ふるさとの山や川、今は亡なき父のことを思い出していました。
懐なつかしさと感謝かんしゃの気持ちで、胸むねがいっぱいになりました。

日本語やまことば いく千万ちよろずの 中ちゆうにして
なつかしきかも 「ふるさと」といふは

《いく千万せんまんもある日本語にほんごの中で「ふるさと」という言葉ほど、私の心にひびいてく
るものはない。》という歌です。

- 思いやりの心をもち親切に
- 郷土や国を愛する心を

ふるさとの 鈴鹿の嶺 呂の 秋の雲
あふぎつつ思ふ 父とありし日を

《ふるさとの鈴鹿の山の頂に秋の雲がかかっている。今ここからじっと仰ぎ見ていると、心にじんとくるものがある。それは幼いとき父に教わった日々である。》という歌です。

信綱の歌は「春風」のように人の心を慰め、励ますものでした。

信綱は書いています。

「歌は、心の花である。花なき園はさびしい。歌なき人生はさびしい。」

また、歌を作る心構えとして「ひろく、ふかく、おのがじしに」という言葉をかかげました。

歌にする題材を「ひろく」目を開いて求め、それを「ふかく」見つめ、そして他人のまねでなく、自分自身の歌を作りなさい、ということではないでしょうか。



信綱が歌を作る心構えとした「ひろく、ふかく、おのがじしに」

湯の山には、次のような歌碑があります。

白雲は 空に浮かべり 谷川の
石みな石の おのづからなる

《白い雲は、ゆったり浮かんでいる。谷川にある、石、石、石、それぞれはみなそれぞれの姿をしている。》という歌です。

出典：「春風になろう」（佐佐木信綱顕彰会）

ち い き 地域に受けつがれる

かめやまじゆく せきじゆく 亀山宿から関宿へ

亀山・関は古代から畿内と東国を結ぶ交通の要所で、江戸時代には街道としての東海道が整備され、市内には亀山宿、関宿、坂下宿の3つの宿場町がありました。現在も鉄道や国道、高速道路の分岐点として重要な役割を果たしています。

1482（文明14）年に書かれた文書に「亀山」という文字が見られることから、15世紀の終わりには町が成立していたようです。江戸時代には亀山城下を含めて、露心庵（今の栄町）から京口門（今の西町）までの約2.5kmの範囲が宿場町として発展しました。

亀山城は、1265（文永2）年には今の若山町にあり、現在の場所には16世紀中頃に関氏が築いたといわれています。1582（天正10）年の本能寺の変で織田信長が自害した後、台頭した羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）と秀吉に反対する戦国大名たちの勢力争いに、関氏をはじめ北勢地方の領主や武士たちも巻き込まれました。1583（天正11）年2月、羽柴秀吉は3万の軍勢を率いて、安楽峠（石水溪上流部）を越えて、亀山城、峯城（今の川崎町）などを攻めました。江戸時代になると、丹波亀山城とまちがえられて天守が取り壊されたといわれています。しかし、交通の要所であったため、徳川家康や秀忠、家光など将軍が上洛する際の宿となり、その城主の多くは譜代大名がつとめました。

多聞櫓は県内唯一の現存する城郭建築であり、亀山西小学校の北には二之丸北埋門と帯曲輪が復元されています。また、亀山市歴史博物館にある模型からも、当時の亀山の様子がよくわかります。

関には、古代三関のひとつ「鈴鹿関」が置かれていました。鈴鹿関が歴史に登場するのは672年の壬申の乱の頃で、789（延暦8）年、桓武天皇によって廃止されました。その場所は関町新所とする説が有力で、2006（平成18）年、西の城壁と見られる築地が発見されました。



亀山城下の模型
（亀山市歴史博物館提供）

でんとう 伝統や文化を見つめよう

中世の頃には地蔵院の門前町が形成され、次第に宿場町が整備されていきました。現在のような町並みの基礎が築かれたのは、1583（天正11）年に中町が整備された頃だと考えられています。江戸時代には大和街道と伊勢別街道が分岐する宿場町となり、参勤交代や伊勢参りなどの人々で栄えました。江戸時代末の1843（天保14）年には、戸数632戸・人口1942人を数えました。

山車がひき出される夏祭りもよく知られ、最盛期には狭い関宿いっばいに16基もの山車がねり、限界を表す「関の山」という言葉が生まれました。

関宿は、旧東海道の中で唯一歴史的な町並みが残ることから、1984（昭和59）年、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。その保存とともに、歴史的な町並みの特性を活かした新しい町づくりに取り組んでいるところです。



関町中町の町並み
（亀山市教育委員会提供）

学習のめあて

亀山宿と関宿は、古くから交通の要所として栄え、現在も鉄道や国道、高速道路の分岐点として重要な役割を果たしている亀山市にあります。

亀山城の多聞櫓は県内唯一の現存する城郭建築であり、亀山市歴史博物館にある模型とともに当時の亀山の様子がよくわかるものが残っています。

関宿は、五十三ある東海道の宿場の中で、唯一、町全体が残っている宿場であり、町並みを保存しようという動きが住民から生まれ、行政とともに歴史的な町並みの再現や保存に努めています。

昔の様子を残す町並みを大切に守り、それを受けついできた地域の人々の取り組みから、伝統や文化を守る大切さや難しさなどについて考えてみましょう。

また、自分たちの住んでいる町や地域について調べ、自然や伝統・文化のもつ意味やよさについて話し合ってみましょう。

考えてみよう

- 1 亀山宿かめやまじゆくや関宿せきじゆくには、どのようなものが残っているのでしょうか。
- 2 関に住む人々が、関宿の町並みまちなを守る活動に取り組もうとしたのはなぜでしょうか。
- 3 古い町並みを守る活動について、どのように思いましたか。話し合ってみましょう。
- 4 人々が伝統でんとうや文化を守り、受けついでいこうとするのはなぜでしょうか。また、こうした活動をする上での課題について話し合ってみましょう。
- 5 自分たちが住んでいる地域ちいきで、受けつぎ、残していきたいものは何でしょうか。話し合ってみましょう。
- 6 自分たちが住んでいる地域で、郷土きょうどの自然や伝統・文化を守る地域の取り組みについて調べてみましょう。

資料

関宿～町並み保存ほぞんの取り組み～

関宿の古い町並み

関宿は、東海道とうかいどうで昔の様子を一番よく残している宿場しゆくばだと教わって、はるかさんたちはさっそく見学に行きました。

そして、ほかの町にはないものや、ほかの町とちがうことをたくさん見つけました。

その後、玉屋資料館たまやでお話をくわしく聞かせてもらいました。

五十三ある東海道の宿場の中で、今も町全体が残っているのは関宿だけなのでとても貴重きです。

大切な町並みほぞんを保存しようという運動が町民から生まれ、1984（昭和59）年に国の重要伝統的建造物群保存地区じゅうようでんとうてきけんぞうぶつぐんに選ばれました。



玉屋資料館（右手前）と町並み

●重要伝統的建造物群保存地区●

昔の様子がよく分かる集落しゅうらくや町並みの中で、文化庁が特に重要だと選んで保存している地区のことです。全国で80地区以上が選ばれていて、三重県では関宿だけです。

資料館で出会った関宿せきじょくのボランティアガイドさんは、次のようなお話をしてくださいました。

● ボランティアガイドさんのお話

関宿まちなの町並みには、ここでくらしていた人たちの知恵や工夫ちえ くふうがたくさん残っています。

わたしたちは、その知恵や工夫を大切にしながら、この町でくらしています。

この町並みが国の文化財ぶんかざいになってからは、町の人たちも知恵をしばり、みんなで協力きょうりやくしながら、もっともっといい町になるように努力どりょくしています。

古くなった家を直したり、昔の町並みに近づけるために町全体の様子を工夫したりしました。町並みの見学に来てくれた人のために、休憩する所やトイレなども作りしました。多くの人が集まり、町の人元気になるようなイベントも考えています。

わたしがガイドをしているのも、この町のよさをたくさんの人に知ってもらいたいからです。

みんなで25年間がんばってきたことで、町に来てくれる人や、町で仕事をしたいと思う人がどんどんふえてきています。何より町の人が、この町並みをほこりに思えるようになってきたのがうれしいです。

ぜひみなさんも、この大切な町並みを守っていただくことに、これから参加さんかしてください。



直す前



直した後



25年以上も、
みんなで相談そうだんしながら、
町並みを保存ほぞんしてきた
なんてすごいね。

だんだんにぎやかに
なってきたのはいいけど、
町まちの人の生活くわんに不便ふべんは
ないのかな。



これからわたしたちが
住む町を、どんな町に
していこうかな。

「わたしたちの亀山市」(亀山市教育委員会)から作成

たゆまぬ努力で

もとおりのりなが
本居宣長

本居宣長は、1730（享保15）年5月7日、松阪本町の江戸店持ち商人、小津定利の子供として生まれました。11歳のとき、父が江戸で病気のためなくなり、この後、宣長を含む家族5人は、魚町に移り住みました。商いがあまり得意でなかった宣長は、23歳のとき、母の勧めもあり医者になろうと京都へ旅立ちます。京都では、医学書を読むために、まず儒学を学び、次に医学を学びます。またひとりで、日本の古典や和歌も勉強しました。

28歳で松阪に帰り医者を開業した宣長は、そのかたわら松阪の歌会に参加し、会員たちに『源氏物語』を講義しました。そんな中で宣長は、歌や『源氏物語』が人を感動させる秘密は、人は「もののあはれを知る」心を持っているからだと考えました。「もののあはれ」とは、嬉しいこと、悲しいこと、また四季の移り変わりなど、物の変化に敏感に揺れ動く心があります。（当時、特に男性は、冷静沈着でなければならないとされていました。）ここに日本人の心の特徴があると考えた宣長は、それを証明しようと、現存最古の歴史書『古事記』（712年成立）の解説を思い立ちます。

ところが、漢字ばかりで書かれた『古事記』は難しく歯が立ちません。自分の勉強不足を痛感する宣長の前に現れたのが、江戸の国学者・賀茂真淵でした。国学とは、日本固有の文化や思想を、古典や歴史、また言葉の研究で明らかにする学問です。

1763（宝暦13）年5月25日、真淵が泊まっていた松阪の旅館新上屋を訪ねた宣長に、真淵は、『古事記』に注目したことは素晴らしいとほめて、「難解なこの本を読むためには、まず『万葉集』から勉強をなさい。学問は基礎が大事だ。」と丁寧に説き諭し、わからないことは手紙で質問し

こなんん 困難をのりこえる

てくれれば答えてあげようと約束してくれます。「松阪の一夜」とよばれるこのただ一度の出会いを機に宣長は真淵の弟子となり、その厳しい指導を受けながら、『古事記』の注釈書『古事記伝』の執筆に取りかかったのです。

『古事記』の冒頭の「天地」という字はどのように読むのか。古代の人は「神」をどんなふう考えていたのか。『古事記』に登場するイルカ、クラゲ、またタニグクとはどんな生きものか。次々に出てくる疑問を一つ一つ丁寧に、時には街道を往き来する旅人の知恵を借りながら、解明していったのです。

努力が実り『古事記伝』全44巻が完成したのは、69歳の夏でした。執筆開始から35年がたっていました。21世紀になった現在でも本書は、『古事記』を読む時の基本書として、また日本古典研究の方法を確立した書として、高く評価されています。

宣長は、鈴と山桜をこよなく愛しました。研究で疲れたとき、鈴の音を楽しむことで心を癒し、自宅の二階の書斎を鈴屋と名付けました。（後に、宣長の家そのものを言うようになりしました。）この建物は松阪市殿町の松阪公園内に移築されていて、本居宣長記念館の横にあり、見学することができます。また、山室山にある奥墓には、山桜が植えられています。

本居宣長六十一歳自画自賛像
（本居宣長記念館提供）



学習のめあて

本居宣長は、京都で医者になるための勉強をする中で、たくさんの人の教えをうけながら、興味のあることに出会いました。故郷に戻ってから、医者を開業するかたわら、京都で学習した古典を人々に伝えていました。そこで、日本人の心の特徴を知ろうと『古事記』の研究に取りかかりました。『古事記』とは、今から約1300年前にまとめられた、現在伝わっているなかで一番古い日本の歴史書です。宣長は、『古事記』の最初にある、二字の漢字の読みを調べるのに5年近くもかかりました。そうした努力の末に、35年かけて『古事記伝』を完成することができました。

本居宣長は、なぜこれほどの長い期間をかけて『古事記』を研究しようとしたのでしょうか。国学の研究者である賀茂真淵との出会いや宣長の著した『うひ山ぶみ』を参考にして、宣長の学問に対する考え方や姿勢について考え、話し合ってみましょう。

また、これまでの自分の取り組みを振り返り、これからの生活でめざしたい夢や目標の実現に向けてどう取り組んだらよいか考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 本居宣長が研究した『古事記』とは、どのような本でしょうか。
- 2 本居宣長はどのようにして35年という長い間、難しい『古事記』の解説に立ち向かったのでしょうか。
- 3 賀茂真淵は、本居宣長と初めて松阪で会ったとき、宣長に『古事記』の研究についてどのように話したのでしょうか。
- 4 本居宣長は学問についてどのような考え方をもっていたのでしょうか。資料の『うひ山ぶみ』を読んで考えてみましょう。
- 5 自分のこれまでの生活を振り返り、自分で立てた目標をやりとげた経験について話し合ってみましょう。
- 6 夢や目標を実現するためには何が必要か、考えてみましょう。

「松阪ひとよの一夜」

宣長は真淵先生に

「『古事記』の研究をしたいと思っております。それについて何かご注意をくださることはございませんか。」

と話しました。すると、真淵はこう語りました。

「それはよいところにお気づきです。私も実は早くから『古事記』を研究したい考えはあったのですが、それには、『万葉集』を調べておくことが大切だと思って、その方の研究に取りかかったのです。ところが、いつの間にか年をとってしまって、『古事記』に手をのぼすことができなくなりました。あなたはまだお若いから、しっかり努力なさったら、きっとこの研究を大成することができましょう。ただ注意しなければならないのは、順序正しく進むということです。これは、学問の研究には特に必要ですから、まず土台を作って、それから一步一步高く登り、最後の目的を達するようになさい。」

宣長が真淵に会ったのは、生涯のうちこの一度だけでした。しかし、宣長はこの時の真淵の教ちゆうじつえを忠実に守り、35年の間努力に努力を続けて、ついに『古事記』の研究を大成しました。有名な『古事記伝』という大著述だいぢョしつは、この研究の結果です。今から250余年前の5月25日の夜、新上屋の行灯しんじョうや あんどんは、その光の下に語った老学者と若者を照らしました。しかも、そのほの暗い灯火ともしびは、わが国の学問の上に不滅ふめつの光を放っています。

【本居宣長 郷土の偉人を知る①】(松阪市教育委員会)から作成

● 『うひ山(い)ぶみ』の一部より

「学問というのは、ただ年月長く倦うまず怠おこたらず、励はげみ努つとめること。つまり継続けいぞくが大事で、方法はたいした問題ではない。どれだけ方法が立派でも、怠なまけて努力しなければ、成果を得ることは出来ない。また、才能さいのうの有無ありなしで、成果に差は出てくるが、才能の有無は生まれつきのことだから、人の力ではどうにもならない。だけどほとんどの場合、才能のない人であっても、怠おそけないで努力すれば、それだけの成果はあるものだ。また、学び始めるのが遅かった人でも、努力すれば、予想を上回る成果を上げることもある。忙しい人も、かえって暇ひまな人よりも成果を上げることもあるものだ。結局は、才能がないとか、学び始めるのが遅いからとか、忙しいと理由をつけてあきらめてはいけない。とにもかくにも一生懸命けんめい努力すれば、出来るものだと考えたほうがいい。何でも途中とちゆうで断念だんねんするのは学問の大敵である。」

『うひ山ぶみ』(現代語訳)

(※ 『うひ山ぶみ』…本居宣長が研究の心構えや態度についてわかりやすく著した国学の入門書)

「宣長ってどんなひと？」(公益財団法人 鈴屋遺蹟保存会 本居宣長記念館)、ほかから作成

はってん 医学の発展のために

のろげんじょう 野呂元丈

江戸時代、本草学という学問がありました。本草学とは薬草を基本として、樹木・鉱物・動物など天然物全体にわたり種類・性質・分布や生態を研究し、記載する学問である博物学の基礎となったものです。本草学は、庶民の生活に役立つ学問として、なくてはならないものでした。

紀州藩主徳川吉宗が八代将軍になり、武芸と実学（実践で役立つ学問）が奨励されるようになると、多気町波多瀬出身の野呂元丈が幕府に取り立てられました。元丈は、幕府お抱えの本草学者として活躍しました。元丈は仲間と一緒に全国各地へ薬草採集の旅を続け、草木を研究しました。元丈は医者でもあったので、病人にとっての薬草の必要性を十分に理解していたのです。また、日本最初の狂犬病に関する治療法を説いた医学専門書を著しました。

47歳の時に、元丈は御目見医師（将軍に直接会える医師）に任用され、幕府の中で安定した地位を得ました。

将軍吉宗は西洋の学問に着目しますが、当時、江戸にはオランダ語を理解する幕府の役人はいませんでした。そこで吉宗は、青木昆陽と元丈にオランダ語の習得を命じています。二人は西洋の学問の研究をしました。これが日本の蘭学の始まりです。



野呂元丈（多気町教育委員会提供）

科学の発展のために

学習のめあて

野呂元丈は、20歳のころ、京都に出て、当時最先端の医学を学びました。また、医学に役立つ本草学も学び、熱心に研究に取り組みました。その後、医者や本草学者として活躍し、薬として効果がある草木を求めて日本各地を訪ねたり、狂犬病に関する医学専門書を著すなど優れた業績を残しました。

時の将軍吉宗は、庶民の生活の向上につながる実学を重視し、そのため西洋科学の知識や技術の導入を進めようとしていました。吉宗は儒学者であった青木昆陽と元丈に、オランダ語の習得を命じました。元丈は10年余りの歳月をかけて『阿蘭陀本草和解』を著し、青木昆陽とともに、日本における蘭学研究の始まりの人物とも言われています。

江戸時代に、元丈ら本草学者によって積み上げられた日本本草学の成果は、その後、生物学、薬学という名の学問に吸収されましたが、明治以降の日本の研究に役立ったとされています。

鎖国をしていた日本において、苦勞して翻訳作業を行った元丈の業績について話し合ってみましょう。また、我が国の科学・技術などの発展につくした、元丈の生き方について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 野呂元丈は、どのような学問や仕事をしていたのでしょうか。
- 2 野呂元丈が、将軍吉宗から青木昆陽とともにオランダ語の習得を命じられたのはなぜでしょうか。
- 3 医者であった野呂元丈が、本草学や蘭学を学んだのはなぜでしょうか。
- 4 長い時間をかけて医学や科学の発展につくした野呂元丈の生き方について、どのように思いましたか。話し合ってみましょう。
- 5 本草学のように、現在の学問や科学・技術などに生かされている、先人の業績について調べてみましょう。

らんがく め ば
蘭学の芽生え

当初は貿易に限られていた交流も、しだいに知的な方面に進みました。オランダ船で輸入されたものには、オランダ語の書籍もありました。これを通じて江戸時代の日本人は、西洋の学術「蘭学」を学ぶことになります。

蘭学の芽生えは8代将軍徳川吉宗の時代です。1720（享保5）年禁書令をゆるめてキリスト教に関係のない書物の輸入を認め、1740（元文5）年ころから青木昆陽、野呂元丈にオランダ語を学ばせるなど、海外知識を積極的に取り入れようとなりました。

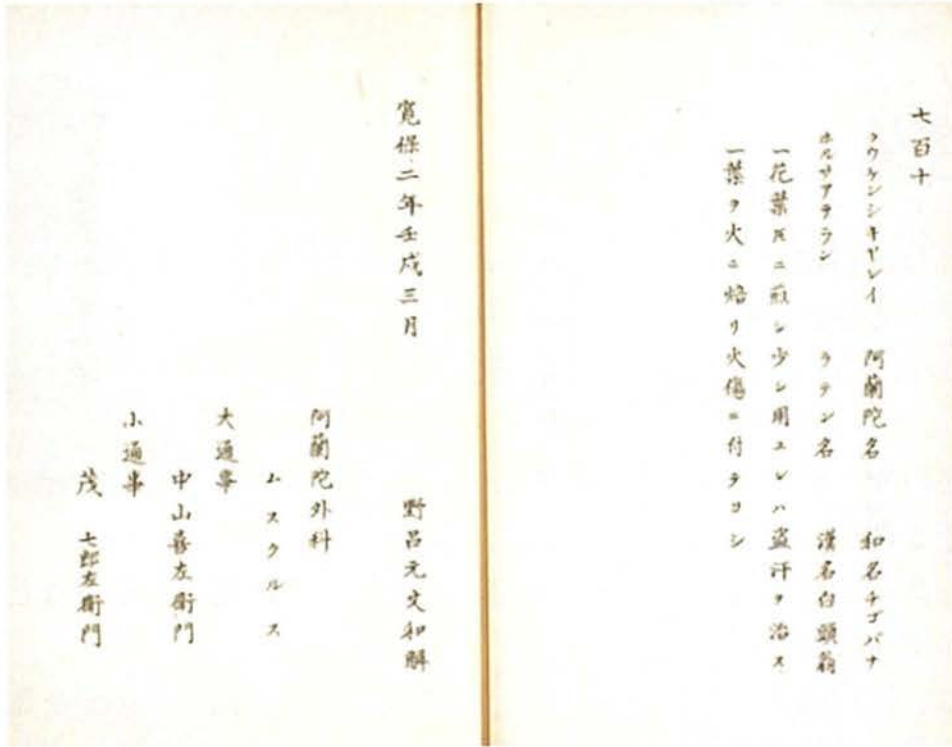
これより先、1659（万治2）年にドドネウスの『草木誌』、1663（寛文3）年にヨンストンの『動物図説』が商館長から献上されていましたが、解読できる人がおらず、空しく幕府の文庫に眠っていました。吉宗はこれにも関心を示し、翻訳を命じました。野呂元丈がオランダ人に質問し解読を試みた成果は、『阿蘭陀本草和解』などとして残っています。

この両書が、わが国の学術に広く影響を与えた最初の洋書といえます。特に『草木誌』は、西洋植物学書の代表として、日本の本草・博物学にも大きな影響を及ぼしました。



ドドネウス『草木誌』図版の模写
「ド>ニウス和蘭本草和解」

- 目標に向かって生きる
- 郷土や国を愛する心を



野呂元文^{やく}訳のドドネウス^{そうもくし}『草木誌』
「阿蘭陀本草和解」

国立国会図書館Webページから作成

らんがく せんくしゃ の ろげんじょう 蘭学の先駆者・野呂元文

元文は、まず手始めにヨンストン^{あらか}が著した『動物図説』の和訳本『阿蘭陀禽獣虫魚図和
解』^げをまとめ、その後十年余りの歳月^{あま さいげつ}をかけて主著『阿蘭陀本草和解』^{しゅちよ おらんだほんぞうわけ}を著しました。また、
その間にも薬草研究や『朝鮮人筆談』^{ちやうせんじんひつだん}等の著述^{ちよじゆつ}を残し、一方で幕府の医官^{ぼくふ}としては寄合医^{よりあいい}
師^し二百石取り^{にひやくこくど}に昇格^{しょうかく}しています。

出典：「わたしたちのふるさと勢和」^{せいわ}（勢和村）

古きよき伝統 でんとう これまでも、これからも

まつお ばしゅう 松尾芭蕉

俳句といえば、日本だけでなく世界でも有名な松尾芭蕉は、伊賀を代表する人物の一人です。伊賀市では、毎年芭蕉の命日である10月12日に俳聖殿（俳聖とは俳諧の聖人という意味で、芭蕉の生誕300年を記念して建設された、芭蕉の旅姿をあらわした建物）において芭蕉祭を開催しています。また、この芭蕉祭にあわせて顕彰俳句の募集を行っており、毎年小中学生も俳句をつくるなど市民の多くが俳句に親しんでいます。

松尾芭蕉は、江戸時代前期の俳諧師で、蕉風俳諧という独自の俳諧を確立させた人物です。俳諧とは、室町時代に始まった伝統的な連歌を、人々が日常使用している言葉を使いこっけい味を加えて詠むもので、季語を入れた17字（5・7・5字）の発句で始め、14字（7・7字）の脇句をつけ、さらに第三句、第四句と連ねていくものです。この発句が明治時代に俳句と呼ばれるようになりました。また、俳諧師とは、俳諧をつくることを専門とする人のことで、俳諧を人々に教える人でもありました。そのため、芭蕉には各地に門人がおり、芭蕉と旅をともにしたり、句会の助けをしたりする人でもありました。杉風、去来、許六などは、その代表的な門人です。

松尾芭蕉は、1644（正保元）年に、松尾与左衛門の二男として伊賀に生まれました。19歳で藤堂藩伊賀国侍大将藤堂良忠に仕え、この頃から京都の北村季吟に俳諧を学びました。この頃の芭蕉は俳号（俳諧を作る際に用いる名前）に「宗房」を用いていました。

23歳の時に主君良忠が亡くなると、武家奉公をやめ、兄方に身を寄せていました。1672（寛文12）年、29歳で初めての撰集『貝おほひ』を上野天満宮に奉納し、俳諧師として生きる決意をして江戸へと向かいました。1675（延宝3）年、大阪の西山宗因（談林派俳諧の第一人者）を歓迎する句会に出席し、俳号を「宗房」より「桃青」に改めました。翌年、



松尾芭蕉
(財団法人芭蕉翁顕彰会提供)

初めて帰郷していますが、以降計12回帰郷したことが記録に残っています。翌1677（延宝5）年、俳諧宗匠（師匠）となり、1680（延宝8）年には深川の草庵に移り住みました。翌年、門人の李下より一株の芭蕉（植物）を贈られ、これが繁茂しました。やがて草庵を芭蕉庵と呼ぶようになりました。これにあわせて、俳号も「芭蕉」を使い始めるようになりました。その後、1684（天和4）年に『野ざらし紀行』の旅に出たのをはじめとして、1687（貞享4）年には『鹿島詣』の旅と『笈の小文』の旅へ、翌年には『更級紀行』の旅へ、さらにその翌年には『おくのほそ道』の旅へと出かけています。この5つの旅の全行程は、延べ約4,800kmにもなります。1694（元禄7）年には、『おくのほそ道』の清書本が完成しました。その年、伊賀に帰郷後、大阪に行きましたが、そこで病に倒れ、ついに10月12日に亡くなりました。死の4日前に口述筆記させた「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」が最後の俳句となりました。

学習のめあて

松尾芭蕉は、蕉風俳諧という独自の俳諧を確立し、俳句を芸術として高めた人物として、世界的にも有名です。

芭蕉は、日本各地へ旅に出かけ、いろいろな土地に名句を残すとともに、多くの紀行文を書きました。「月日は百代の過客にして、行きかふ人も又旅人也（人生は旅であり、また旅は人生である）」で始まる『おくのほそ道』はとくに有名です。

芭蕉は、旅を通じて自然や人間を深く見つめ、いつまでも変わらないものの中にある価値を大切にしつつ、移り変わるものの中から生まれてくる価値を重視する（不易流行）という考えをもつに至ったとされています。

俳句は日本だけでなく世界にも「Haiku」として広がり、人々に親しまれています。俳句が人々に愛される理由について考え、日本の伝統や文化のよさについて話し合ってみましょう。

また、芭蕉の作品を味わい、旅を通じて自然や人間を深く見つめ、俳句を芸術として高めた芭蕉の人生について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 俳諧とはどのようなものでしょうか。
- 2 日本をはじめ世界の人々に俳句が愛されている理由について考えてみましょう。
- 3 芭蕉は、どのような思いで日本各地へ出かけ、名句や紀行文を残したのでしょうか。
- 4 芭蕉が生前最後に詠んだ「旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る」は、どのような意味なのか考え、話し合ってみましょう。
- 5 芭蕉はたくさんの句を残しています。それらの中から自分が気に入った句を選び、その句の意味や選んだ理由などについて発表してみましょう。
- 6 俳句を通じて日本の伝統や文化のよさについて考え、話し合ってみましょう。

資料

世界に広がる俳句

～ Haiku in English ～ *By Matsuo Basho*

☆英語で芭蕉の俳句を味わってみましょう。

The old pond;
A frog jumps in, –
The sound of water.

「古池や 蛙飛びこむ 水の音」

On a journey, ailing –
My dreams roam about
Over a withered moor.

「旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る」

●日本語だけのものではなくなった俳句

【EU (欧州連合) 発】

海外初の俳句ポストは、ベルギーのブリュッセルにある駐EU (欧州連合) 日本政府代表部の建物入り口に置かれています。ファン＝ロンバイ欧州理事会議長は、自ら俳句集を出版するほどの俳句愛好家です。そこで、日本の外務省とEUは、「人的・文化的交流の促進」実施のため、毎年6月にEU英語俳句コンテストを開催しています。

【ニューヨーク発】

アメリカのニューヨーク市では、2011年11月に、俳句と絵を使った交通標識が登場し、交通安全を啓発する運動「Curbside Haiku（カーブサイド・ハイク）」が始まりました。ニューヨーク市内にある文化施設付近で事故が多発している12カ所と学校周辺道路を対象に、216枚のアート標識が設置されました。そこには、英語だけでなく、スペイン語などで書かれた俳句もあります。

俳句を芸術に高めた 松尾芭蕉

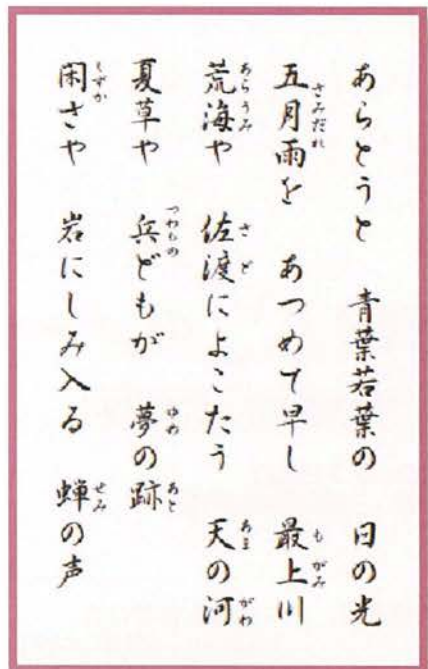
旅から旅へ

芭蕉は、日本各地へ旅に出かけ、いろいろな土地に名句を残すとともに、多くの紀行文を書きました。「月日は百代の過客にして、行きかふ人も又旅人也」で始まる有名な『おくのほそ道』のほか、『野ざらし紀行』、『笈の小文』、『更級紀行』などがあります。

『おくのほそ道』は1689（元禄2）年に江戸（今の東京都）を出発し、東北地方から北陸地方を回って、岐阜県までの、約2,500kmにもなる5か月間の旅でした。今のよう
新幹線や飛行機もなかった時代で、さぞたいへんな旅だったことでしょう。そのような旅の中で芭蕉は右のような名句を残しています。

当時の旅は命がけでしたが『おくのほそ道』の旅を終えた芭蕉が、ふるさとの伊賀に帰り、ふたたび江戸にもどったのは1691（元禄4）年のことでした。

その3年後、芭蕉は旅の途中の大坂（今の大阪市）で病気になり、1694（元禄7）年、51歳で亡くなりました。亡くなる前に詠んだ「旅に病んで 夢は枯野をかけ廻る」（旅の途中で病気になっても、夢の中では草の枯れた野原を旅している。という意味）という俳句は、旅を愛した芭蕉の人生を表していると思われま



「わたしたちの伊賀市」（伊賀市教育委員会）、ほかから作成

三重県心のノート

小学校5・6年

平成 26 年 3 月発行
発行者 三重県教育委員会

著作権所有 三重県教育委員会
〒514-8570 三重県津市広明町 13 番地
